

# 6

**Byobuzan-west-site & Toyohara(2)-site 2001**

A report of excavation of Byobuzan-west-site & Toyohara(2)-site The board of education of MORITA-village Aomori, Japan

## 屏風山西遺跡・豊原(2)遺跡

農村総合整備事業（森田市町村型）に伴う緊急発掘調査報告書

青森県西農村整備事務所  
青森県森田村産業課  
青森県森田村教育委員会

## ごあいさつ

面積わずか25km<sup>2</sup>ほどの小さな村でありながら、46箇所もの遺跡がある。このことは、森田村のもつひとつの大きな特徴と言えましょう。そのため昔は村内のいたる所で畠から土器や石器が出土したという話を聞いたものです。

現在の開発工事にあたっても、必ずと言っていいほど工事予定地における遺跡の所在が話題となり、しばしば教育委員会の方に問い合わせが有ります。当教育委員会では、平成9年度から、従来の石神遺跡の学術調査のみを目的とした体制を改め、開発に伴う緊急発掘調査にも対応できる体制の整備につとめてきました。現在も農道造成に伴う発掘調査などが継続中です。そこでは、平安時代の住居跡や、あまり見られないような製鉄関連の炉跡なども発見され、開発関連の調査でも、貴重な発見が有るものだなあと驚くと同時に、それに伴う発掘調査の重要性をあらためて認識させられることになりました。

今回の調査は、農道造成工事に伴う調査でしたが、これは平成16年度まで実施される、農村総合整備事業に係るもので、このほかにも遺跡範囲内での工事が予定されていることから、今後それらに係る発掘調査が順次実施されてゆきます。その中からは、何か人々の耳目を集めのようなものも発見されるのではないか、とも期待しています。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護という観点から調査に御協力いただいた、西農村整備事務所をはじめとする関係各機関の皆様に、深く感謝の意を表しまして、ご挨拶とさせていただきます。

平成12年3月21日

森田村教育委員会

教育長 石田榮市

## 例 言

1. 本書は、青森県西津軽郡森田村大字森田字屏風山及び駒ヶ瀬地内における、屏風山西遺跡（遺跡番号19011）と、森田村大字床舞字豊原地内における、豊原(2)遺跡（遺跡番号19044）の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、農村総合整備事業（森田市町村型）に係る農道3-1造成事業に伴う事前の緊急発掘調査で、発掘調査から本書の刊行に至るまでの費用は、青森県西農村整備事務所が負担した。
3. 本調査は、青森県（知事 木村守男）と森田村（村長 佐藤昭三）の委託契約のもと、森山村教育委員会（教育長 石田榮市）が調査主体となり、佐野忠史（森田村教育委員会学芸員）が調査担当者となって実施した。
4. 調査の日程は以下の通りである。

事前調査 1997年（平成9）9月7日・10月21日

事前協議 1999年（平成11）4月21日

発掘調査 1999年（平成11）8月1日～31日

整理調査 1999年（平成11）12月1日～28日

2000年（平成12）4月2日～12月28日

報告書作成 2001年（平成13）1月4日～3月21日

5. 本書の編集は、佐野忠史が行った。また、原稿の執筆は佐野が行ったが、依頼原稿については、文頭にその文責を記した。
6. 遺跡の地学的調査は、川村眞一氏（秋田桂城短期大学講師）にお願いし、玉稿を頂戴した。
7. 出土した炭化材の分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8. 遺物の注記記号は、屏風山西遺跡は「99BW」である。なお豊原(2)遺跡からは今回遺物の出土はない。
9. 本調査によって生じた、遺物・写真・図面等の資料は、森山村教育委員会の責任において森田村歴史民俗資料館分室に保管し、活用を図るものとする。
10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、以下の方々の御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・順不同）。

花田貴美人 相馬信吉 清野彰史 木村真明 谷川章雄 鈴木 徹 高山 優 並木 仁

池田悦夫 土肥 孝 原田昌幸 七戸博道 成田 青 中田聖章 楠田善七 三橋培高

福士 熊 小田原聰子 米谷武次 兼平 勉 山谷信雄 三橋 犀 佐藤時男 佐藤慶五

村越 潔 鹿沼邦彦 三宅徹也 岡本旗嗣 榊原滋高 中田青矢 葛西 効 高橋 潤

青森県西農村整備事務所 森田村産業課 森田村遺跡整備・活用検討委員会

森田村中央公民館 木造町役場経務課 青森県教育庁文化課埋蔵文化財班

鰐ヶ沢町教育委員会生涯学習課

## 調査体制

### <調査組織>

調査主体 青森県西津軽郡森田村教育委員会  
調査員 佐野 忠史 森田村教育委員会社会教育係学芸員・日本考古学協会会員  
調査協力者 川村 真一 秋田桂城短期大学講師・日本地学教育学会会員  
調査補助員 高橋 渉 森田村教育委員会臨時職員（平成9年度まで）  
調査補助員 外崎 学 森田村教育委員会臨時職員（平成11年度から）  
現場作業員 鶴賀谷としあ 佐藤フヨエ 笹村 爾 石川るみ子 平間カネ 神 良子 佐藤久枝  
山谷 孝子 原田忠津子 七戸博行 瓜田千恵子 葛西慎也 工藤芳子 三上みち  
鶴賀谷載子 木村清明 原田 司 葛西真理子 平山佐智夫 野宮 潤 奈良祐馬  
七戸キクエ 山谷トミエ  
整理作業員 鶴賀谷としあ 笹村 爾 瓜田千恵子 鶴賀谷載子

### <事務局>

事務局 青森県西津軽郡森田村教育委員会社会教育係  
事務局长 石田 栄市 森田村教育委員会教育長  
事務局次長 鶴賀 咲 森田村教育委員会教育次長（平成9年度まで）  
事務局次長 佐藤 浩章 森田村教育委員会教育次長（平成11年度まで）  
事務局次長 瓜田 又・ 森田村教育委員会教育次長（平成12年度から）  
事務局員 山谷 敬二 森田村教育委員会教育次長補佐兼社会教育係長  
事務局員 渡辺 一晋 森田村教育委員会社会教育係社会教育主事補  
事務局員 小笠原洋二 森田村教育委員会派遣社会教育主事

## 凡例

1. 屏風山西遺跡の試掘坑は、東から順にNo 1～14を設定し、「試掘坑No 1」のように表記した。
2. 遺構番号は、試掘坑別に付け、その属性に関係なく「試掘坑No12-1号遺構」のように表記した。
3. 標高はT.P.（東京湾中等潮位）を基準とする値を示している。
4. 図中の座標値は、国土方眼座標第X系の数値を示している。
5. 基本層序はローマ数字（I～IV）で、遺構覆土はアラビア数字（1, 2, …）で表記した。
6. 遺構・遺物図版の縮尺は、遺構1/20または1/40、遺物は1/2とし、図版ごとに縮尺を示した。
7. 遺構・遺物図版のスクリーントーンの指示は以下の通りである。

<遺構> ■■■■ : 燃土 ■■■■ : 炭化物 ■■■■ : 燃土炭化物

<遺物> ■■■■ : 頸椎器

# 目 次

## ごあいさつ

## 例言・調査体制・凡例

第1章 遺跡と調査の概要 .....	1
1-1 調査に至る経緯 .....	1
1-2 遺跡の概要 .....	2
1-3 周辺の遺跡 .....	3
1-4 地理的環境 .....	4
1-5 調査の方法と経過 .....	5
第2章 調査の成果 .....	7
2-1 調査の概要 .....	7
2-2 基本層序 .....	7
2-3 縄文時代の遺構と遺物 .....	9
2-3-1 縄文時代の遺構 .....	9
試掘坑No11-1号遺構 .....	9
2-3-2 遺構外出土の縄文土器 .....	11
2-4 平安時代の遺構と遺物 .....	13
2-4-1 平安時代の遺構 .....	13
試掘坑No 4-1号遺構 .....	13
試掘坑No12-1号遺構 .....	14
(分析) 試掘坑No12-1号遺構出土炭化材の分析 パリノ・サーヴェイ株式会社 .....	14
2-4-2 平安時代の遺構外遺物 .....	18
2-5 江戸時代の遺構と遺物 .....	19
2-5-1 江戸時代の遺構 .....	19
「館野沢上溜池用水堰跡」 .....	19
2-5-2 江戸時代の遺構外遺物 .....	23
第3章まとめと考察 .....	24
3-1 遺跡の地学的考察 .....	24
3-2 屏風山西・豊原(?)遺跡の復元 .....	27

## 主要参考文献

## 写真図版

## SUMMARY

## 報告書抄録

# 第1章 遺跡と調査の概要

## 1-1 調査に至る経緯

森山村には46箇所に及ぶ遺跡が所在し、時代も縄文前期～近世までバラエティーに富んだものとなっている。このような状況下で、森田村産業課より森田村内における、農村総合整備事業に関する問い合わせが、森田村教育委員会にもたらされた。1997年（平成9）4月3日のことと記憶している。その席には、青森県西農村整備事務所の担当技師も同席し、今後の計画の概要と予定地が示された。その結果、工事予定地の多くが周知の遺跡包蔵地内にあたっていることから、発掘調査が必要になる旨を伝えた。そうなると費用や、時間の面で工事側の負担が大きくなることや、森田村教育委員会は、遺跡の調査体制を立ち上げて間もないことから、全ての計画地における遺跡発掘調査に対応できなくなつため、後日、青森県教育庁文化課埋蔵文化財班の担当官を交えて再度、調整を図ることとした。その調整会議の席で、調査は森田村教育委員会が担当することに決定した。これを受け、その後は、西農村整備事務所と森田村教育委員会の間で、予算や調査期間に関する話し合いがもたれることになった。ところが森田村の遺跡と言うのは、代表的な石神遺跡、八重菊遺跡、山田遺跡以外は、遺跡の存在は知られていても、過去に発掘調査が実施されていないため、その実体、性格、構造・遺物の包蔵量・密度などは全く謎で、見当もつかない状況であった。

そのため、工事予定地内の遺跡の存否確認調査が不可欠となったが、森田村教育委員会側は調査担当可能な学芸員が1人であるため、時間が無い。そこで、土日や祭日を使って、確認調査をすることになった。初夏から秋口にかけて確認調査は実施されたが、そのほとんどのところで遺跡が確認され、そればかりか從来の遺跡範囲には含まれなかつたところでも、遺跡が確認されたり、遺跡を包蔵する危険性があることが判明した。じつは今回調査した屏風山西遺跡を新発見の遺跡として登録することになったのは、この確認調査の結果を受けたためである。

以上のことから、農道3-1造成にあたり、事前に調査を実施することが確認された。そして平成10年度に入り、いくつかの事前遺跡調査予定事業との調整会議を数回実施した結果、平成11年8月に発掘調査が実施されることに決定した。最初に計画が立ちこまれてからはや2年、平成11年4月のことである。



写真1 豊原(2)遺跡の確認調査（位置は図3③）

## 1-2 遺跡の概要

今回調査の対象となった遺跡は、豊原(2)遺跡と屏風山西遺跡である。本論を始める前に、まず両遺跡の概要を述べてみたい（写真2・図1）。

### ＜豊原(2)遺跡＞

森田村大字床舞字豊原地内の丘陵部に位置する。その多くは畑作地や山林で、一部は住宅地となっている。西側脚下に広がる狹ヶ館溜池を挟み、石神遺跡と隣接するが、遺跡として認識されたのはつい最近の事で、埋蔵文化財パトロールの結果、遺跡範囲内から土師器が発見され、1994年（平成6）年6月に遺跡として登録されている。平安時代の遺跡とされているほか、古文書（豊島編発行年不詳）によると江戸時代～明治期には墓域が所在したとされるが、正確なことは不明である。

### ＜屏風山西遺跡＞

森田村大字森田字屏風山、駒ヶ淵に所在する。位置的には豊原(2)遺跡の南接する丘陵部とその西や南に流れる沢に沿った丘陵の麓部分に広がる。「I-I 調査に至る経緯」で述べたように、この遺跡も最近になって確認された遺跡で、平成10年度版『青森県遺跡地図』（青森県教育委員会1998）に初めて登録された。しかし、この近辺では、昔から土器などが出土したことが知られ、「森田村誌」上巻（豊島ほか1980）には、遺跡範囲付近から円筒土器が出土したことが記されている。

青森県教育委員会（1998） 「青森県遺跡地図」

豊島勝哉ほか（1980） 「森田村誌」上巻 森田村教育委員会

森島勝哉編（発行年不詳） 「下原家文書 江戸新田記録」卷7-2 森田村教育委員会ほか

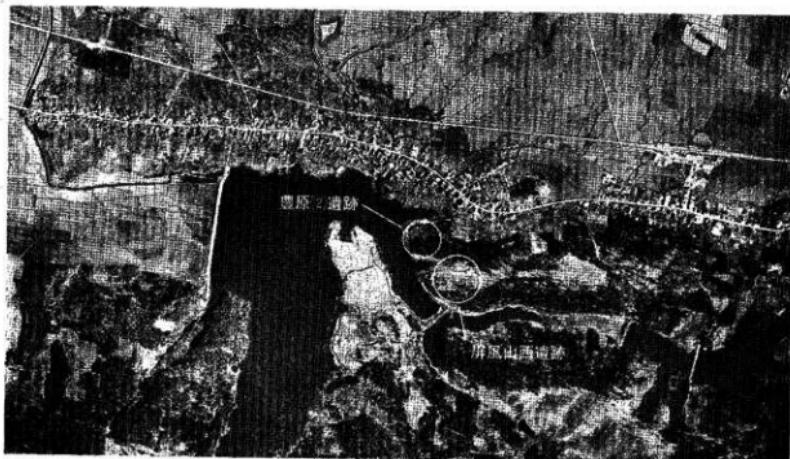


写真2 屏風山西・豊原(2)遺跡の位置（1948米軍撮影・国土地理院掲載許可済）

### 1-3 周辺の遺跡

両遺跡の周辺には、いくつかの遺跡が所在しているが、これらも概観してみたい（図1・表1）。狹ヶ館溜池を挟んで西には石神遺跡が所在する。石神遺跡には、縄文時代前期～晚期、平安に及ぶ集落が営まれ、北西部には小貝塚が所在する（江坂ほか1970）。昭和30年代末からの開田に際して、遺跡の主体部は消滅したとされていたが、最近の調査によって、縄文時代前半の集落跡や、平安時代の遺跡が確認されるなど、まだまだ遺跡は残存していることが判明した（佐野2000ほか）。

石神遺跡の南接する藤山(1)遺跡は、藩政時代に植林された松林の下に、今なお堅穴状の窪みを数多く目視することができる。また遺跡の一部を構成する通称「カメコ山」では、晚期の土器が出土している（西村ほか1952）。また狹ヶ館溜池を隔て北に隣接する豊原(1)遺跡や、真鶴遺跡は、溜池の源となる沢筋を生命線として営まれた遺跡と考えられる。現在その大部分が宅地に姿を変え、遺跡は消滅してしまったように考えられる。しかし特に豊原(1)遺跡では、溜池内で遺構や遺物が確認されるなど、縄文中期・晚期とされる集落の一部が残存しているようだ（三宅ほか1994）。このほかにも屏風山東遺跡や、中世の館跡とされる床舞館遺跡なども所在する。

今回調査対象となった、豊原(2)遺跡、屏風山西遺跡とも、これら周辺遺跡と共存していたであろうことは言うまでもない。



図1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	屏風山西	森田字屏風山ほか	縄文	散布地
2	豊原(2)	森田字豊原	平安	散布地
3	石神	床舞字石神・藤山ほか	縄文（前～晩）、平安、中世、近世	集落跡、貝塚、社寺跡
4	狹ヶ館	人館字八重菊	縄文	散布地
5	大館	大館字千歳ほか	縄文、平安	集落跡
6	床舞館	床舞字駒ヶ淵	中世	館跡
7	月見野(1)	森田字月見野	縄文（晩）、平安	散布地
8	月見野(2)	森田字月見野	平安	散布地
9	月見野(3)	森田字月見野	縄文（晩）	散布地
10	藤山(1)	床舞字藤山	縄文（後・晩）	集落跡
11	八重菊(2)	大館字八重菊	縄文（前）、平安	散布地
12	鶴喰(7)	床舞字鶴喰	縄文（前）	散布地
13	真鶴	床舞字真鶴	平安	散布地
14	豊原(1)	床舞字豊原	縄文（中・晩）	集落跡
15	屏風山東	森田字屏風山ほか	縄文	散布地

青森県教育委員会（1998） 「青森県遺跡地図」

江坂輝ほか（1970） 「石神遺跡」 森田村教育委員会

三宅徹也ほか（1994） 「青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ」 青森県埋蔵文化財調査報告書第165集 青森県教育委員会

西村正衛ほか（1952） 「青森県森田村付近の遺跡調査概報」『古代』第5号 早稲田大学考古学会

佐野忠史（2000） 「石神遺跡3」 森田村遺跡整備・活用計画発掘調査報告書3 森田村教育委員会

## 1-4 地理的環境

両遺跡とも、岩木山北麓に広がる台地が、雄大な津軽平野へと移り変わる付近の台地上に位置する。地形的には山田野段丘の中位段丘上に位置し、豊原(2)遺跡が10数m～30m弱、屏風山西遺跡が10数m～30m程の標高である（水野ほか1987）。縄文時代前期がピークとされる「縄文海進」の折には、現在は北の方向25kmにまで後退した十三湖が広がりを見せ、「古十三湖」として両遺跡から數kmの距離にある津軽平野の三角州にまで広がっていたことだろう（図2）。

両遺跡の南辺や西辺部は、幅の狭い谷底平野となるが、これはそこを流れる小河川によってもたらされた土砂堆積物によって形成されたもので、現在の狹ヶ館溜池などの農業用溜池は藩政時代に、それらを塞き止めて造営されたものである。今回調査した屏風山西遺跡の試掘坑No14で顕著に見られる粘土に拘泥された多量の穂は、この河川によって運搬されたものらしい（写真3）。詳細は、「3-1 遺跡の地学的考察」にゆずる。おそらく、この河川流を背景として、両遺跡が営まれることになったのだろう。



写真3 屏風山西遺跡試掘坑No14東壁面

水野 裕ほか（1987） 「土地分類基本調査 五所川原」  
青森県農林部土地改良第一課



図2 屏風山西・豊原(2)遺跡周辺の地形（水野ほか1987に加筆）

## 1-5 調査の方法と経過

調査は、まず遺跡の存否確認から開始した（表2）。これは、工事の実施測量に際して行う「試験掘」に立会うと同時に、万全を期すため試験掘の数を追加して遺漏なく遺跡の存否を確認する方法をとった（図3）。

この確認調査は1997年（平成9）9月7日に農道3-1予定地北側の豊原(2)遺跡で、10月21日に南側の現在の屏風山西遺跡の範囲で実施した。この結果、豊原(2)遺跡の範囲では耕作等の擾乱で遺跡が全く確認できなかったため、この段階で発掘調査の対象外とした（写真4・5）。それとは逆に周知の遺跡ではない南側部分に遺跡が包蔵される可能性が発生したため、「1-1 調査に至る経緯」で述べたように、「屏風山西遺跡」を新たに遺跡として登録し、その周囲を含め発掘調査の対象範囲とした（青森県教育委員会1998ほか）。

屏風山西遺跡の発掘調査は1999年（平成11）8月1日に開始された。調査は予定される農道の幅員を横断するような形で、基本的には幅1mの試掘坑を設定して調査し、遺跡の発見など、必要に応じて調査区を広げる方法をとった。調査地には江戸時代以降に植林された松の木がいたるところに林立しており、これ以外の方法は事实上不可能だったのである。

試掘坑は松の木立の間に設定し、10箇所を予定していたが、状況を見て適宜その数

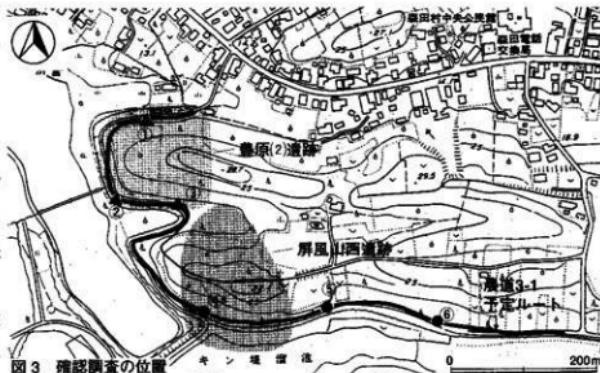


図3 確認調査の位置



写真4 豊原(2)遺跡周辺



写真5 豊原(2)遺跡確認調査（位置は図3①）

を増やし、結果的に14箇所の試掘坑を設定した(図4)。掘削は、全て人力で行い、遺物は層を確認しながら取り上げ、必要に応じてドットマップを作成した。図面は、土層断面図を1/20で作成するほか、平板測量によって1/20ないし1/40の平面図を作成した。また、炭化物や焼土の広がりが見られた場合には1/10の微細図も作成している。なお、写真は35mmのリバーサルとモノクロームフィルムを用いて、適宜撮影している。

調査では、道標は3箇所の試掘坑で確認されたに過ぎず、そこを拡張する形ですべての調査を終了するという形をとった。調査が完了した試掘坑は順次埋め戻し、8月31日に全ての試掘坑の埋め戻しが完了し、作業用プレハブの撤去及び発掘用具の撤出も終了した。

発掘終了後、遺物は森田村歴史民俗資料館分室に保管し、遺物発見届の提出等の諸手続きのあと、12月に遺物洗浄、注記、図面整理などの作業を行い、年度が変わって2000年(平成12)4月より報告書作成に向けた作業に取りかかった。

青森県教育委員会(1998)「青森県道路地図」

森田村教育委員会(1998)「森田村の遺跡」

「森田村文化財振興計画書」

表2 屏風山西・豊原(2)遺跡 調査工程表

1997(平成9) 年 度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
事前協議	■	■										
事前準備												
立会<豊原(2)>												
立会<屏風山西>												
1999(平成11) 年 度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
事前協議												
事前準備												
用具・プレハブ搬入												
発掘<屏風山西>												
現場撤収作業												
基礎整理作業												
整理調査												
2000(平成12) 年 度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
整理調査												
報告書作成												

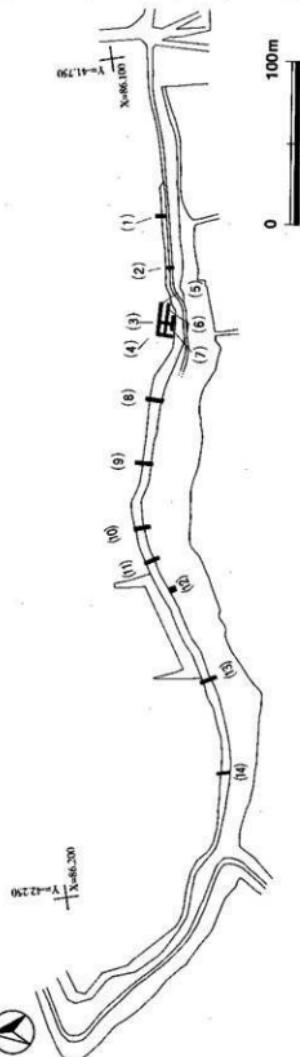


図4 屏風山西遺跡試掘坑設定位

## 第2章 調査の成果

### 2-1 調査の概要

本論に入る前に、ここでは調査の概況を述べようと思う（図4）。調査の結果、縄文時代、平安時代、江戸時代の遺構・遺物が確認された。ただしまとまりをもって発見されたわけではなく、散見されるといった状況であった。また発見された場所は、予想された遺跡範囲とはやや、「ずれ」を生じており、遺跡範囲の東端部からその東側にかけてでの発見であった。縄文の遺構・遺物は試掘坑No.1～3・6・11～13で、平安時代の遺構・遺物は試掘坑No.3・4・6・8・12で、江戸時代の遺物は試掘坑No.5・8・12で発見されている。また農道予定地が調査区西側で江戸時代に構築された用水堰跡と並行するため、試掘坑No.8～14では堰（水路）跡とそれに付随する堤（土盛）の調査も実施した。

### 2-2 基本層序

屏風山西遺跡の調査では、I～IV層に及ぶ層序が確認された（図5）。I層は現在の地表面を構成する層である。客土や耕作上、樹木の根による擾乱を受けたもので、率直に言えば擾乱土である。II層は黒色土層で、江戸時代に調査区付近が屏風山の植林や用水堰の構築など、人為的な改変が行われる以前に地表面を構成していた層と考えられる。今回の調査区では、江戸時代の造成や戦後の農地開墾によってこの層が欠落しているところが多く見られた。残存しているところは上部を削り取られていることが多く、樹木の根が甚だしく侵入している。III層は暗褐色土層で、一部上部の客土などによつて変色しているところもある。II層と同様、樹木の根が甚だしく侵入している。後世の人為的擾乱により欠落することが多いが、試掘坑No.8では直下に白頭山・苦小牧火山灰を含むIV層が認められる。そのため、それ以後に堆積した層ととらえられる。IV層は白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm）を層中に含む。この噴出年代はA.D.947年（早川・小山1998）と考えられているため、この前後に堆積した層と考えられる。V層は暗褐色土層で、遺物の出土から平安時代の文化層と考えられる。これも後世の擾乱により欠落しているところも有る。VI層は黒褐色土層で、出土遺物から縄文時代の文化層と考えられる。VII層は泥炭層で試掘坑No.2のみで確認され、縄文上器が出土している。VIII層は褐色土層で地山のローム層とその上部層との漸移層である。IX層は明黄褐～褐色を呈するローム層で試掘坑のはばすべての地山を成す。通常森田村の丘陵部では、この層の上部に黄褐色軽石質粗粒火山灰層がのっているが、本調査区では欠落している。江戸時代の水路に作う土盛には、この層に由来する土が使われていたため、かつては調査区周辺に堆積していたと推測される。X層は青灰色粘土層で、IX層のグライ化したものである。II～IV層は試掘坑No.14で確認され、安山岩・頁岩などで構成される中小の礫がローム土で拘泥された層である。これらは河川により運搬されたものと考えられる（川村眞一氏「3-1遺跡の地学的考察」参照）。

基本層序は以上のように把握されたが、上部の層は欠落していることが多い。これは江戸時代以後

の植林・水路造成・農地開墾が大きな要因と言えるが、調査の結果、縄文時代・平安時代にも少ないとながら人々の生活の痕が見られ、その時代の擾乱の痕跡も認められる。いずれにしても調査区周辺には人為によって層が擾乱された痕跡が顕著に認められた。

早川由紀夫・小山真人（1998）「日本海を挟んで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白神山—」

【火山】43

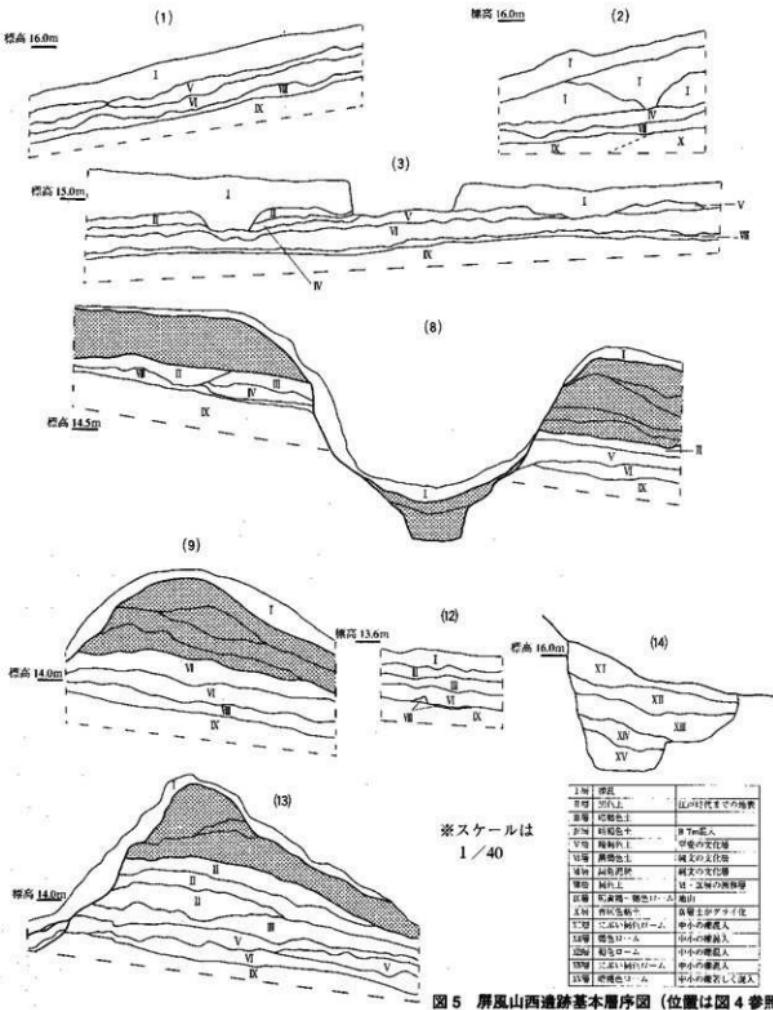


図5 屏風山西遺跡基本層序図（位置は図4参照）

## 2-3 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査地は石神遺跡に近接していることから、あるいは同様な災害跡も発見できるのではないかとも期待をもったが、遺構が1基確認された以外は縄文土器が散見される程度であった。また、基本層序VI層が縄文土器包含層ということが確認されたが、層自体が消滅しているところもあり、少量出土した土器も細片主体であった。土器の存在から、かつては付近に縄文の集落や遺構が存在したことが予想されるが、直近に江戸時代の堤とそれに伴う堤が築かれ、また松が植林されるなど、江戸時代から人の手が入り、戦後も農地開拓のため擾乱を受けたことから、それらは消滅してしまった可能性が高い。出土した土器は中期の円筒上層式土器を中心とし、下層dI式～板根式土器が確認されている。しかし摩滅がひどく、調整痕が読み取れない物が多く有る。遺構や遺物が発見されたところは、新規登録した屏風山西遺跡の範囲よりも東寄りの遺跡範囲外であった（図6）。これは、「森田村誌」上巻（豊島ほか1980）に記載される円筒上層式土器出土地点に近似し、遺跡範囲の変更が必要が生じた。

豊島勝也ほか（1980）「森田村誌」上巻 森田村教育委員会

### 2-3-1 縄文時代の遺構

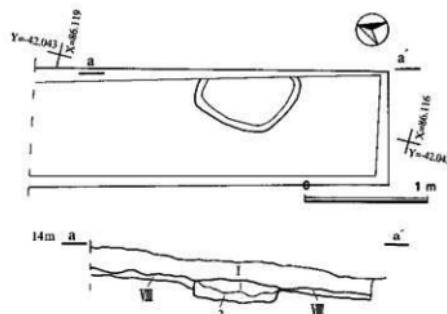
試掘坑No.11-1号遺構（形状：土坑、時期：縄文中期、遺物：円筒上層式土器、用途：不明）

長軸80cm、短軸70cm、確認面からの深さ20cmを測ると推定される。立木の影響で全掘できなかつたが、平面プランは不整形を呈すると判断される（図7）。覆土は上下2層に分層され、共にロームが混入し締まりが良い。遺物は上下両層より円筒上層式土器と思われる深鉢の胴部破片が出土しているが、細片のため正確な器形はわからない。また摩滅が著しく、地文などの調整も明瞭でない（図8）。今回



図6 縄文時代の遺構・遺物

の調査で発見された縄文時代の遺構はこれのみであるが、本遺構の上部が後世の削平により失われていることや、縄文土器の散布が見られることから(図9・写真8)、かつては本遺構周辺には縄文時代の集落に伴う遺構が存在したが、後世の搅乱・削平などによって縄文の遺構が消滅してしまったのではないかと推測される。



層	色調	混入物等
1. 灰黃褐色土 [10YR4/2]		ローム混、炭化物少量
2. 暗褐色土 [10YR3/4]		ローム混

図7 試掘坑No.11-1号遺構



写真6 試掘坑No.11-1号遺構出土遺物



写真7 試掘坑No.11-1号遺構



表3 試掘坑No.11-1号遺構出土遺物観察表

No.	種別	部位	出土層位	時代	成形調査等	参考
1	縄文深鉢	胴部下端	1層	中期	地文LR2、削底下端ナメ調査	円筒上層式?
2	縄文深鉢	胴部下端	1層	中期	底減により不明	円筒上層式?
3	縄文深鉢	胴部	2層	中期	底減により不明	円筒上層式?

0 5cm

写真8 試掘坑No.11-1号遺構出土遺物

### 2-3-2 遺構外出土の縄文土器

今回の屏風山西遺跡の調査では、遺構外からも散見される程度の縄文土器が出土している。基本層序VI層が縄文時代の文化層と判断され、そこから縄文土器が出土しているが、VI層が削平・欠滅している所も多く、後世の層より出土している物も多い。その他試掘坑付近に散布しているものもあるが、土器はいずれも摩滅した細片であり後世に搅乱された結果、地表や後世の堆積層に流れ込んだのであろう。出土した土器は円筒上層式を中心に、下層 d1 式～樅林式に及ぶ。このことから搅乱・削平される以前には、これらの時期の遺構が存在したことが推測できる（図9、表4）。

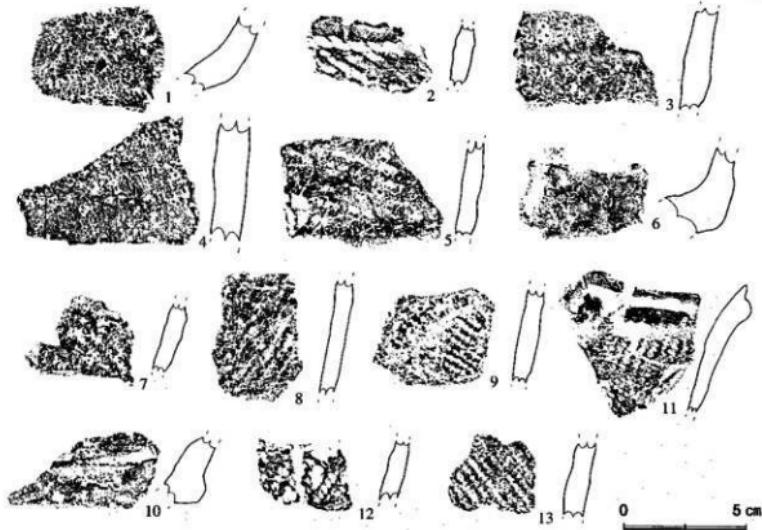


図9 遺構外出土縄文土器

表4 遺構外出土縄文土器観察表

No	種別	部位	出土試掘坑	出土層位	時代	成形調整等	備考
1	縄文深鉢	側部下端～底部	No 1	VI層	中期 小明		円筒上層式
2	縄文深鉢	口縁付近	No 3	I層	前期 地文LR, 横板に縄文押文 1 条		円筒下層d1?
3	縄文深鉢	側部下端	No 3	I層	中期 不明		円筒上層式
4	縄文深鉢	側部下端	No 3	I層	中期 不明		円筒上層式, 3と同?
5	縄文深鉢	側部下端	No 3	VI層	中期 地文RL, 下端ナゲ調整		円筒上層式
6	縄文深鉢	側部下端～底部	No 3	VI層	中期 側部下端ナゲ調整		円筒上層式?
7	縄文深鉢	側部	No 3	VI層	中期 地文RL		円筒上層式
8	縄文深鉢	側部	No 6	II～III層	中期 地文LR		円筒上層式
9	縄文深鉢	側部	No 6	VI層	中期 地文RL		円筒上層式
10	縄文深鉢	側部下端～底部	No 11	II層	中期 側部下端ナゲ調整		円筒上層式
11	縄文深鉢	口縁付近	No付近	表探	中期 地文LR, 突起部に渦巻状沈線, 内唇部に沈線		樅林式
12	縄文深鉢	側部	No 8付近	表探	中期 地文羽状繩文?		円筒上層式
13	縄文深鉢	側部	No 8付近	表探	中期 地文RL		円筒上層式

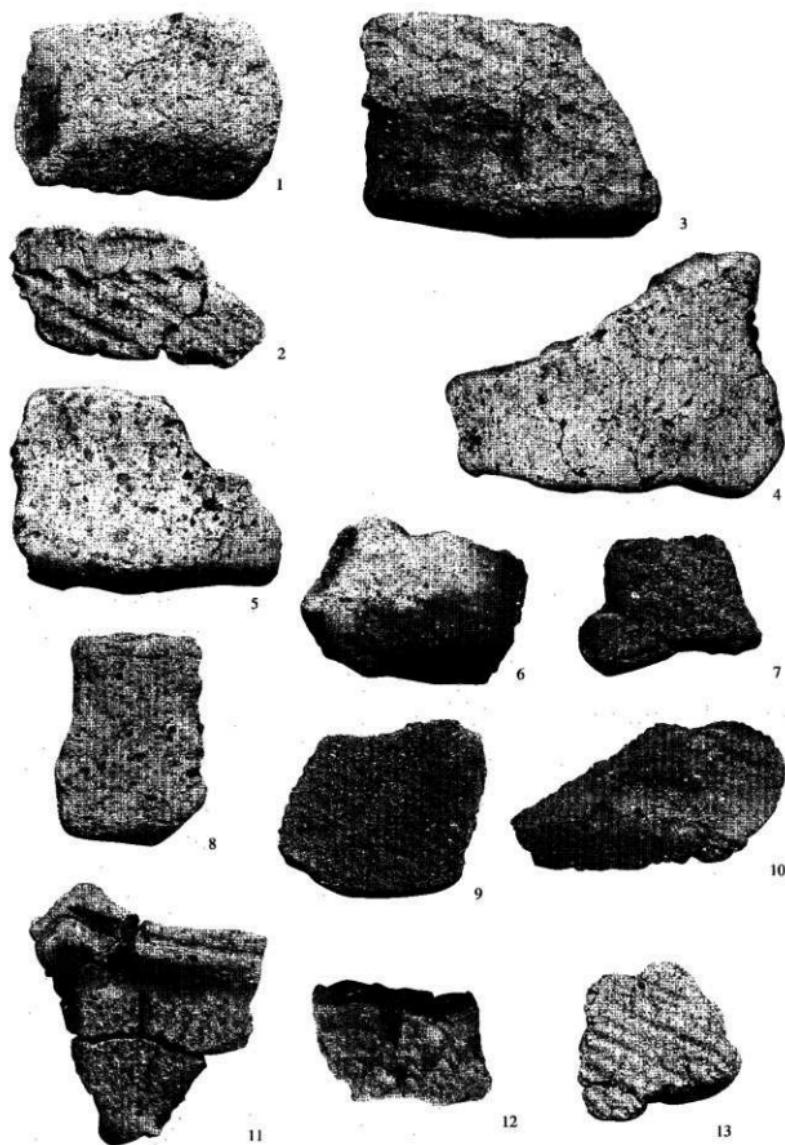


写真8 遺構外出土焼文土器

## 2-4 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺跡は、森田村のほとんどの遺跡において確認されるものであり、当遺跡もその例外ではない。堅穴状遺構と土坑が確認され、遺構外から土師器や須恵器も出土しているが、厳密な年代になると、資料が僅少のため、ハッキリしたことは言えない。ただ試掘坑No 4-1号とNo 12-1号遺構は、覆土に白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm, 降下年代A.D.947年, 早川・小山1998）が堆積しているため、構築・稼動年代をそれ以前とすることはできる。また、この時代の遺跡も、江戸時代の荒廃や戦後の農地開拓による搅乱のため、集落の広がりなど、面的な遺跡の確認はできていない（図10）。

早川由紀夫・小山真人（1998）「日本海をはさんで10世紀に相次いで起った二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—」

『火山』43

### 2-4-1 平安時代の遺構

試掘坑No 4-1号遺構（形状：堅穴状遺構、時期：A.D.947年以前、出土遺物：なし、

用途：炭窯？）

遺構の南コーナー以外は、農道予定地外となるため確認できなかつたが、後述する試掘坑No 12-1号遺構のような方形ないしは長方形の平面プランを呈する堅穴状遺構と推測される（図11, 写真9）。遺構上部は近年までの耕作によって削平を受けたため、確認面からの深さは15cmほどである。覆土は3層に分層され2層に白頭山・苦小牧火山灰がブロック状に堆積するため、推測されるその降下年代（A.D.947年）以前の構築・稼動年代が割り出される。覆土中には炭化物が混入し、特に3層では顕著である。3層の炭化物は縫まりのない細片が中心であり、底部及び壁部にはその下に焼き締った焼土の堆積が見える。そのため遺構の機能を炭窯と推定している。なお遺物は出土していない。

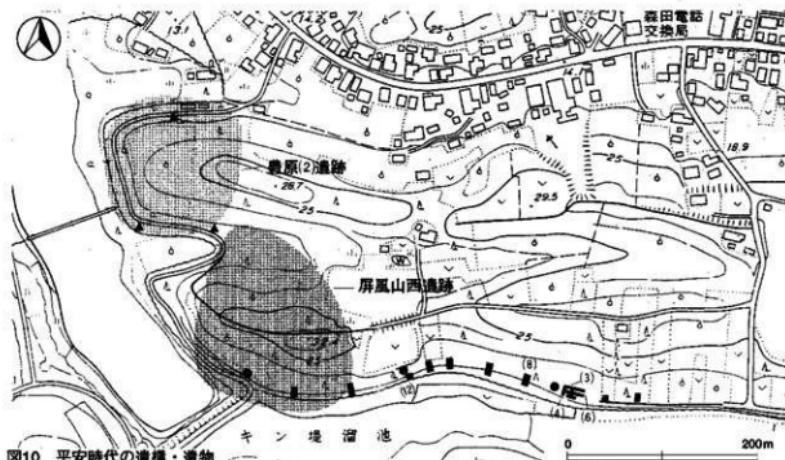


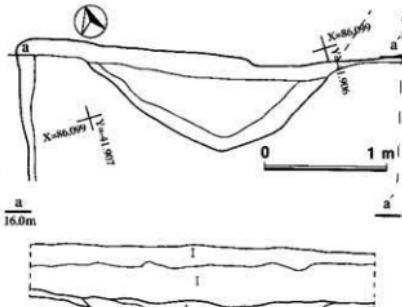
図10 平安時代の遺構・遺物



写真9 試掘坑No4-1号遺構

試掘坑No12-1号遺構（形状：竪穴状遺構、  
時期：A.D.947年以前、出土遺物：円筒  
上層式土器、用途：炭窯？）

一部立木の根による搅乱を受けているが、長方形の平面プランを呈する小型の竪穴状遺構で、長軸1.8m、短軸1.6m、確認面からの深さ40cmを測る。底面に焼土炭化物が濃密に分布するため消失遺構、炭窯等の機能が考えられたが、炭窯と推測した（図12、写真10・13）。覆土2層に白頭山・苦小牧火山灰（A.D.947年降下）を含むため、それ以前の構築・稼動と考えられる（写真12）。焼土は固く焼き締まり、底面および一部壁面にも分布するため、遺構内がかなり高温で熱せられたことがわかる。炭化物は細片であり、遺構構築材と見られるものはない。遺構が、丘陵の南斜面の麓に位置していることを合わせ、機能を炭窯と考えた所以である。前述した試掘坑No4-1号遺構も立地的に同様な所にあるほか、底面とそれを覆う焼土・炭化物の状況から見て、同様な機能を持つ遺構で、時期的にも並行すると考えられる。炭化物については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。結果を後掲するので参照されたい。遺物は、流れ込んだ円筒上層式土器の胴部破片が覆土より1点出土するのみである（図13、写真11）。



層	色調	混入物等
1. 黒褐色土	[10YR3/2]	ローム・炭化物混
2. B-Tm層		ブロック状に堆積
3. 炭化物層		細かい炭化物が堆積

図11 試掘坑No4-1号遺構

## （分析）試掘坑No12-1号遺構出土炭化材の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

屏風山西遺跡は、岩木山北麓に位置している。発掘調査では、試掘坑No12において、やや形の崩れた長方形の竪穴遺構が検出されている。遺構の底部には焼土がみられ、炭化材も検出された。今回の



写真10 試掘坑No12-1号遺構

層	色調	混人物等
1. 黒色土	[10YR2/1]	
2. B-Tm層		集積して堆積
3. にぶい黄褐色土 [10YR4/3]		炭化物・B-Tm少量
4. 炭化物層		下部に焼土集積

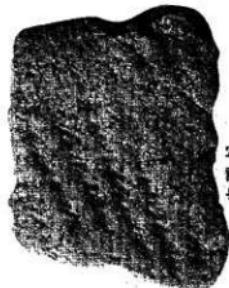


写真11  
試掘坑No12-1  
号遺構出土遺物

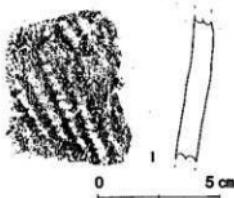


図13 試掘坑No12-1号  
遺構出土遺物

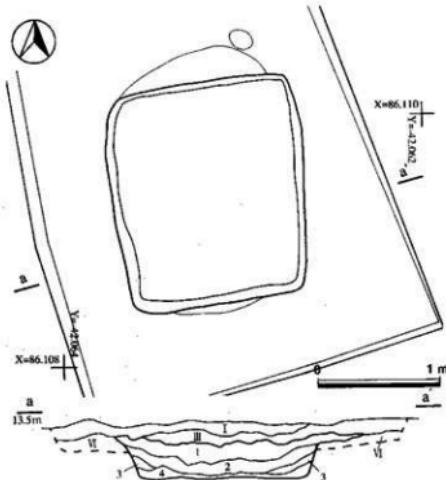


図12 試掘坑No12-1号遺構

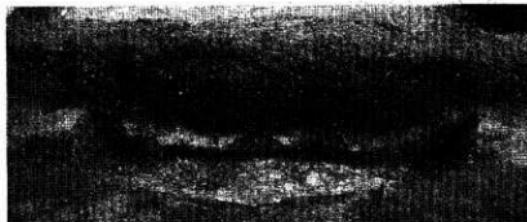


写真12 試掘坑No12-1号  
遺構土層断面

表5 試掘坑No12-1号遺構出土遺物観察表

No	種別	部位	出上層位	時代	成形調整等	備考
1	圓文深鉢	頭部	3層	中期	地文LR	円筒上端式

分析調査では、造構底部より採取された炭化材を対象として放射性炭素年代測定を実施し、造構の年代を検証する。また、年代測定を行う炭化材は造構の構築材あるいは燃料材である可能性も考えられる。これらの試料について樹種同定も行い、今回の年代測定のための一資料とするほか、当時の用材選択についての情報も得る。

## 1. 試料

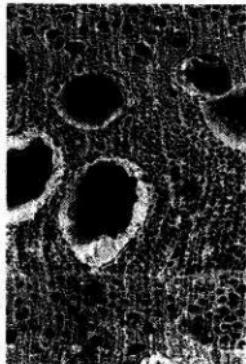
試掘坑No12-1号造構の覆土は、上位より1～4の4層に分層されている。覆土最上部の1層は黒色土、その下位の2層は白頭山-苦小牧テフラ (B-Tm:町田ほか1981)と推定されるテフラブロックが集積している上層である。3層は2層の下位にあたり、造構の周縁部～壁面に認められるにぶい黄褐色土層である。4層は造構底面に全体に認められ、土層には炭化物が含まれ、下部には焼土が認められている。放射性炭素年代測定および樹種同定を行う試料は4層より採取された炭化材1点である。

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、株式会社地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社 (BETA ANALYTIC INC.)により加速器質量分析法 (AMS法) を用いて行った。半減期はLIBBYの5,568年を使用し、写真13 試掘坑No12-1号造構焼土・炭化物検出状況

写真14 炭化材断面微鏡写真



1. クリ (12トレンチ1号造構)  
a : 木口, b : 桟目, c : 板目



- 16 -



200 μm : a  
200 μm : b, c

年代値は西暦1950年を基点として何年前(B.P.)であるかを算出したものである。今回は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて $\sigma$  $^{13}\text{C}$ を算出し、さらに $\sigma$  $^{13}\text{C}$ 値から同位体効果による年代補正を行った。また、誤差は標準偏差( $1\sigma$ )に相当する年代である。

## (2) 樹種同定

木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の削断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

年代測定結果を表6に示す。同位体効果により補正された年代は、 $1200 \pm 40$ B.P.であった。

表6 放射性炭素年代測定結果

地点名	遺構名	測定年代	$^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ (0/00)	補正年代	Code No
試掘坑No12	1号遺構	$1220 \pm 40$	-26.1	$1200 \pm 40$	Beta-147892

### (2) 樹種同定

炭化材は落葉広葉樹のクリに同定された。主な解剖学的特徴を以下に示す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔眼部は1~2列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

## 4. 考察

測定された年代値は8世紀に相当する年代値である。2層に認められるテフラがB-Tmであれば、噴出年代はA.D.947年(早川・小山 1998)と考えられていることから、今回測定された年代値は層位的に矛盾していない。測定を行った炭化材は、試掘坑No12-1号遺構床面の焼土が認められる土層より検出されたものである。そのため、測定された年代値は、遺構の構築に近い年代であると考えられる。したがって試掘坑No12-1号遺構は8世紀に構築されたと推定される。

また、試掘坑No12-1号遺構の用途は詳細は不明であるが、年代測定を行った炭化材は燃焼材や遺構構築材の一部である可能性が考えられる。炭化材の樹種はクリであった。

これまでに青森県内で行われた調査によれば、住居などの構築材あるいは燃焼材と考えられる炭化材にはクリが多く認められている(鶴倉 1987, 1980, 1987; パリノ・サーヴェイ株式会社 1998)。本遺跡周辺でこれまでに行なった調査でも、住居構築材としてクリが多く認められている。

本遺跡の周辺の森林は、ミズナラやブナを中心とするものであったと考えられることから、クリは選択的に利用されていた可能性がある。また、クリは果実が食用可能であり、縄文時代には栽培が開始されていたことが指摘されている(千野 1983)。このことを考慮すると、古代においてもクリの栽培によって果実の収穫と安定した木材の供給が行われ、クリ材の利用が多くなった可能性もある。

- 千野裕道（1983）「縄文時代のクリと周辺種生—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ p.25-42
- 早川由紀夫・小山真人（1998）「日本海をはさんで10世紀に相次いで起きた二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—」  
『火山』43 p.403-407
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 p.562-569
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）「外馬屋前山II遺跡出土植物遺体の同定」『外馬屋前山II遺跡』
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第242集 p.128-133 青森県教育委員会
- 鷲倉巳三郎（1978）「昭和51年度青森県内から出土した炭化材の樹種について」『源常平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 p.388-389 青森県教育委員会
- 鷲倉巳三郎（1980）「板碑(2)遺跡から出土した炭化材の樹種」『板碑(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第59集 p.1-2 青森県教育委員会
- 鷲倉巳三郎（1987）「山本遺跡出土の炭化木」『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第105集 p.203-204
- 青森県教育委員会

## 2-4-2 平安時代の遺構外遺物

屏風山西遺跡の調査では、遺構外から少數の須恵器・土師器片が出土している（図14）。出土したのはいずれも予想した遺跡範囲より東側で、縄文土器の出土範囲に重なる。基本層序IV層が白頭山-苦小牧火山灰（A.D.947年降下）含有層で、V層がそれ以前の平安時代の文化層と考えているが、後世の搅乱の結果I～III層から出土に耐えない程の摩滅した細片の出土もある。出土遺物から、搅乱前には今回検出した2つの遺構の周辺にも、これらと関連した遺構が存在した可能性が考えられる。



図14 遺構外出土須恵器

表7 遺構外出土須恵器観察表

No	種類	部位	出土試掘坑	出土層位	時代	成形調整等
1	須恵器底	肩部～胴部	No.8	V層	平安	胴部タチ削り、肩部タキ
2	須恵器底	肩部～胴部	No.8	IV層	平安	胴部タチ削り、肩部タキ

## 2-5 江戸時代の遺構と遺物

この時代の遺構は、調査路線と並行して展開する農業用用水堰とそれに伴う堤（土盛）をあげることができる。この用水堰と堤（土盛）は、それまでの地形を改変して構築されていることが確認できた。前述したように、縄文時代や平安時代の遺跡像が明確にならない一つの要因として、この段階での地形改変をあげることができる。また後述するが、用水堰を掘ることによって生じた土を利用して堤を構築する様子も窺えた。また、用水堰の付近や堤（土盛）の基底面から陶磁器が僅ながら出土しており、年代的には18世紀後半～19世紀前葉に比定された。これらの陶磁器は、用水堰と付随する堤の構築年代を語るものと考えられる。

### 2-5-1 江戸時代の遺構

「館野沢上溜池用水堰跡」(形状：水路と堤，時期：安永3 [1774] 年以降，

遺物：磁器・縄文土器，用途：用水堰)

水路と付隨する堤からなり、開口部の最大幅3m、堤からの深さ2m弱を呈する。調査区の中央から西半分で、農道予定地と並行して重なるため調査を実施した。屏風山西遺跡の北1.5kmにある中福原（現木造町福原）の開発に際して、辻勘四郎が安永3（1774）年に「館野沢溜池笠置、堰台築き」をして用水を引く記録が有り、おそらくこれが今回調査した用水堰と考えられる（農島1989）。また、文政3（1806）年の蓬引きや泥上げなどの用水堰管理の分担を示した記録には、「床前村」（現森田村床舞集落）の分担として、「館野沢上溜池用水堰壳筋、反別式反歩」（工藤1987）とあり、この頃には使用さ



図15 江戸時代の遺構・遺物

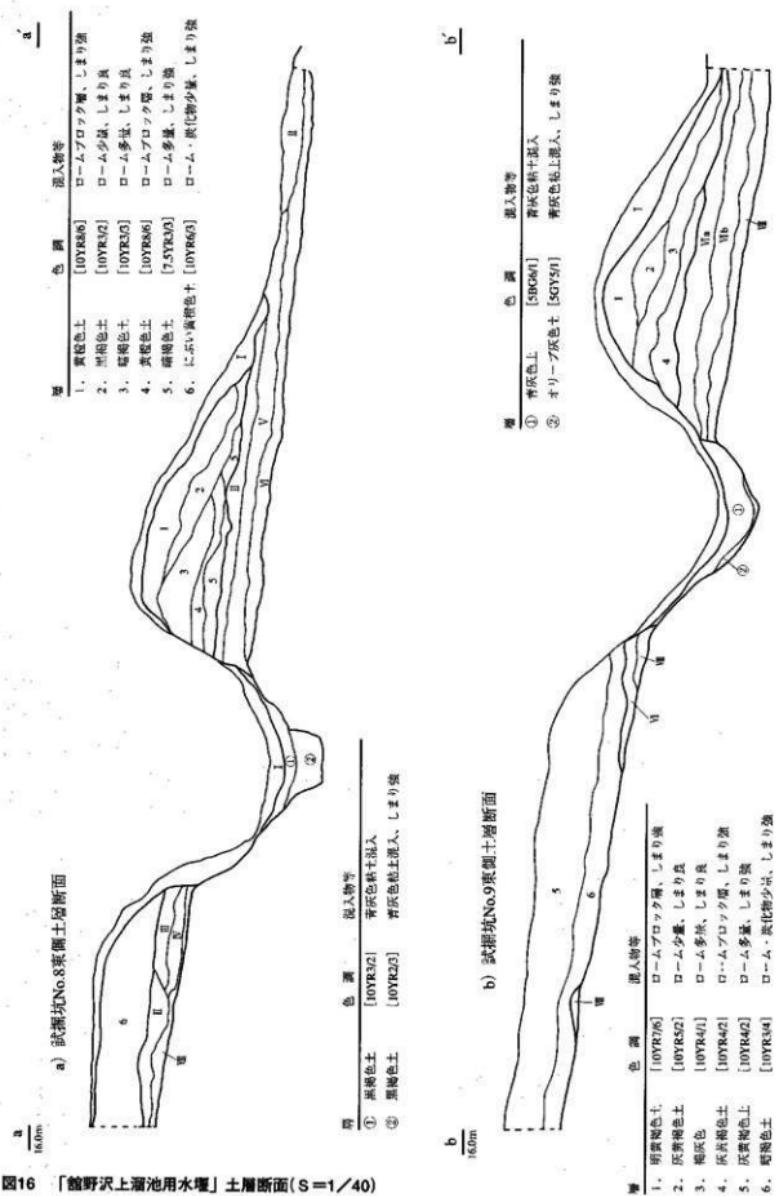


図16 「越野沢上灌池用水堰」土層断面(S=1/40)

れていたこともわかる。また、昭和30年代発行の『森山村管内図』にも記載があることから、この時期にはまだ使われていた可能性がある。

その『森山村管内図』によると用水堰は館の沢溜池を取水口に、調査区付近では、標高15mの等高線と並行して屏風山西



写真16 今も現場付に残る用水堰跡

遺跡を東西に走り、北上後豊原(2)遺跡の南・西・北端をかすめ、現在の森山村中央公民館付近にまで延びるルートが描写されている(図22)。また明治初年には「与三郎セキ」とも呼ばれていたようだ(豊島編発行年不詳、図24)。

調査の結果、この用水堰(水路と堤)は、

1. 傾斜した自然地形をある程度平らに削り、堰の位置を決め、削った土を周りに盛る。
2. 次に水路部分を掘り、そこから出た地山(ローム)を傾斜の下側の土盛の上に覆い被せ、築き固めて堰を完成させる。

というような方法をとったと推測された(図17)。また、試掘坑No.9の堰部分両側の凸凹した断面や、試掘坑No.8の用水堰の底部に見える台形の掘り込み、さらに両者の両側堤の内面で層が切り取られた状態がみられるが(図16・図17④)、これらは前述したよう



写真17 用水堰土層断面(試掘坑No.13)

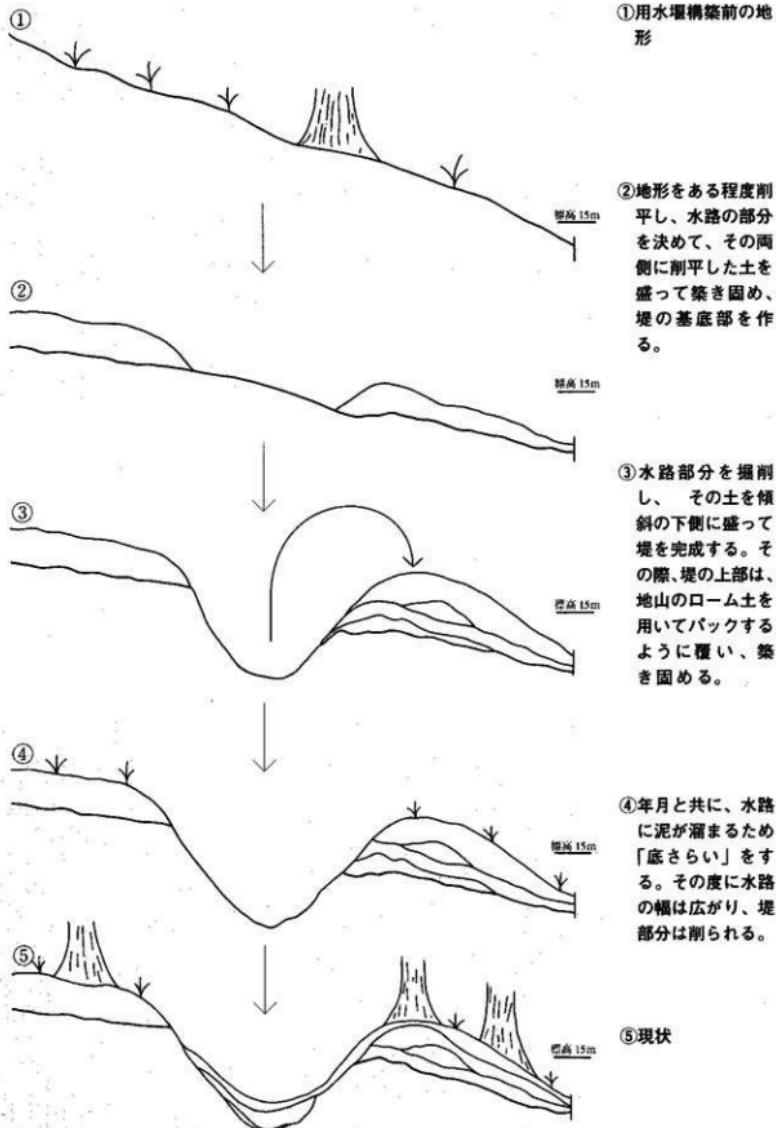


図17 用水堰構築概念図

堆積するため、泥上げなどの保守管理が必要となり、用水堰の「底さらい」を行った際、堰の底や堰の内側部分も削り取った結果と考えられる。そして「底さらい」した土は堤の上に置かれ、堤の上に位置する基本層序Ⅰ層を形成した一つの要因と考えられる。なお遺物は、試掘坑No.8の堤の土盛の直下の基本層序Ⅱ層より18世紀後半～19世紀前半と考えられる磁器の細片が出土している（図19）。これは文献にあらわれる用水堰の構築年代と矛盾しない。これ以外は、堤の土盛から縄文土器が出土するのみである（図18）。

工藤勝男（1987）『木造町史』近世編 下巻 p.117 木造町役場  
豊島勝藏（1989）『森山村史』下巻（岩）p.53 森山村教育委員会  
豊島勝藏編（発行年不詳）『下原家文書 津軽新山記録』巻7-2 p.201 森山村教育委員会ほか



図18 用水堰跡出土遺物

表8 用水堰跡出土遺物観察表

No	種別	部位	出土試掘坑	出土層位	産地	時代	成形調査等
1	丸付磁器仏頭器？	口縁部付近	No.8	Ⅱ層	肥前	江戸（18世紀後半～19世紀前半）	外腹圓線1本、内面矢羽文
2	縄文深鉢	側部	No.13	堤3層	—	中期	肩部タテ削り、肩部タキ

### 2-5-2 江戸時代の遺構外遺物

江戸時代の遺構外遺物は、2点しか出土していない（図19）。両者とも細片で器形の復元は困難だが、1は肥前（唐津）の刷毛目ないしは二彩の平鉢の口縁、2は肥前の染付碗の底部と考えられる。ともに18世紀後半～19世紀前半代に比定される。これは、前述した用水堰の構築・稼動時期と矛盾しない。おそらく用水堰の構築や「底さらい」など用水堰の保守管理に携わった人々が残した遺物であろう。

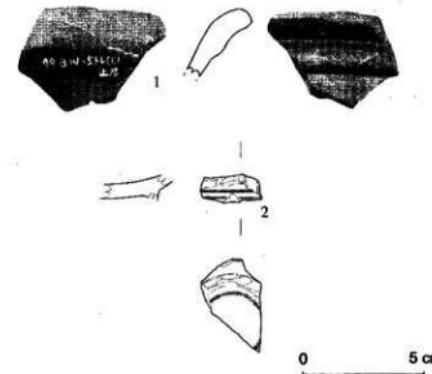


図19 遺構外出土陶磁器

表9 遺構外出土陶磁器観察表

No	種別	部位	出土試掘坑	出土層位	産地	時代	成形調査等
1	陶器刷毛目平鉢	口縁部	No.5	I層	肥前	江戸（18世紀後半～19世紀前半）	化粧拂绘透明釉施釉
2	磁器碗	底部付近	No.12	I層	肥前	江戸（18世紀後半～19世紀前半）	高台部圓線1本

## 第3章 まとめと考察

### 3-1 遺跡の地学的考察

川村 真一（秋田杜城短期大学講師）

#### 1. 周辺の地形

森田村をほほ東西に通る旧国道の南側で、東部の杉沢溜池から狹ヶ館溜池までの区域は、標高約50mの県畜産指導所、地球村周辺を除き、標高15~40mの平坦面をもつ中位段丘となっている。

この面を侵食する大小河川の多くは堰き止められ溜池となっており、狹ヶ館溜池、小戸六溜池、六沢溜池、館の沢溜池、キン堤溜池、杉沢溜池等が存在する。

森田村月見野郵便局の南からほほ直線方向南方、鶴田町との町境付近共栄開拓までの間は25~40mの標高をもち、六沢溜池地区と館の沢溜池地区を分ける分水嶺の地形となっている。

館の沢はこの分水嶺に源をもち、二つの支谷が合流した後、二箇所で堰き止められ館の沢溜池、キン堤溜池を作っている。溜池の下流は氾濫原を形成しているが、溜池堰堤から約0.3kmの間は水田となっている。ここから約0.4km下流で三度堰き止めが行われてキン堤溜池をつくり、その後狹ヶ館溜池へ流入する。

発掘調査地は館の沢溜池下流水田を南北に通る農道から第三堰堤までの沢沿いの北側自然堤防域（水田の一段上の平場）ないしは谷斜面麓約0.5kmの区間である。

#### 2. 周辺の地質と調査地の土層

##### (1) 周辺の地質

森田村を通る旧国道の南側を占める地域の地形は山田野段丘とよばれる。地層の主要構成層は山田野層で、その地質は凝灰質シルト、中粒砂、粗砂、細~中疊層を主体とし、それらに粘土を挟在するのを特徴とする。山田野層の上位には暗赤褐色、褐色の粘土質ローム層が堆積し、



写真18 キン堤溜池と屏風山西遺跡

さらにその上位には黄褐色の軽石質粗粒火山灰層が重なり、それらを黒色土が地域全体を覆っている。

調査地の谷斜面および自然堤防域にあたるところでは、褐色粘土質ローム、黄褐色軽石質粗粒火山灰は流出して見られず、これらの二次的再堆積層（黒土、ローム、粘土、細礫等の混合層）として堆積している。

試掘坑No 1 から下流には砂、シルト、粘土からなる自然堤防帯が形成されているが、斜面麓付近では若干の砂礫を含む。自然堤防帯の下位で旧流域部分には、シルト～細砂に充填された中礫からなる礫層が堆積しており、調査地での礫層は試掘坑No 12から下流に認められ、とくに、試掘坑No 14で明瞭である。試掘坑No 14付近の模式横断地質断面図を以下に示す（図20）。

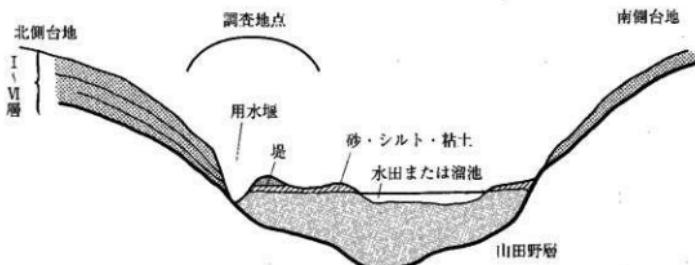


図20 屏風山西遺跡模式横断地質断面図

## (2) 調査地の土層

今回の調査ではI～IV層に及ぶ基本層序が把握されているが（「2-2 基本層序」参照）、その内容について地学的見地から所見を述べたい。それに際しては、土層を①斜面下部・平野、②地山、に大別することにする。

### ①斜面下部・平野

表上の下は試掘坑No 3 を除き、3～4層に分けられる。

表土は黒褐色を呈し、多くの場合客土で黒褐色土とローム、炭化物が混合している。表土下の黒褐色土層はシルト（黒ボク土）からなる。その下位層には部分的に白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）を挟むする腐食質の暗褐色層がある（試掘坑No 3、8、12）。さらにその下位は黒褐色土層となる。なお、試掘坑No 2 は小谷（沢）の出口にあたっており、有機物が多く泥炭化し、強い黒色を呈している。この層の下は地山との漸移層となる。漸移層はロームと黒褐色土の混合層で褐色～明褐色を呈する。

### ②地山

明褐色～にぶい黄褐色のローム・粘土およびシルト質礫層からなる。

試掘坑No 2 付近は小谷（沢）の開口部にあたっており、ここではグライ化した青灰色粘土となってい る。試掘坑No 12からはロームに明黄褐色礫が混入し、試掘坑No 14では基質が細砂質の中礫層となる。

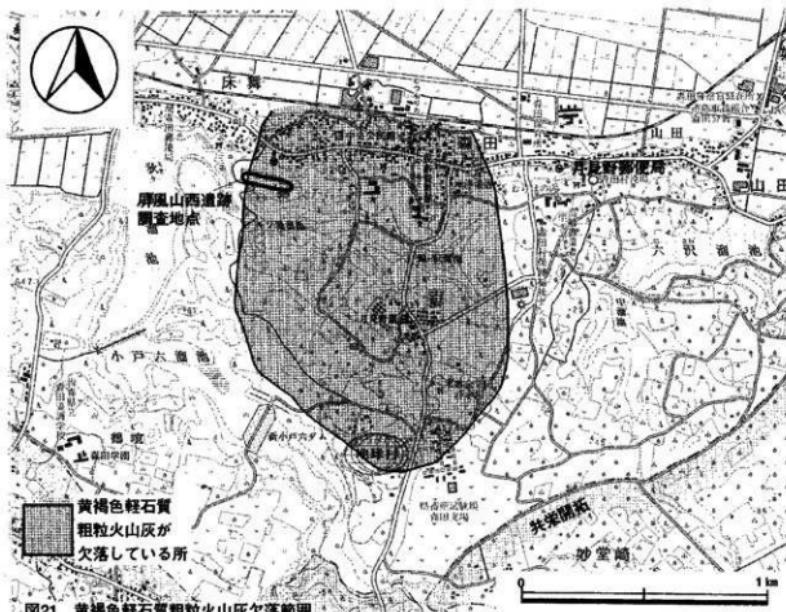
### 3. 調査区域の火山灰分布

森田村を中心とする周辺地域一帯は、表土の黒色土層の下は黄褐色軽石質粗粒火山灰層、その下位は、褐色粘土質ロームによって被覆されている。しかし調査区域の北側および南側の台地上には黄褐色軽石質粗粒火山灰を欠き、褐色粘土質ロームを直接黒色土層が覆っている。

調査地南側台地（段丘）上では黄褐色軽石質粗粒火山灰は認められないものの、丘陵を刻む小谷にできた崖（路頭）の段丘面の縁にはわずかながら黄褐色軽石質粗粒火山灰の存在が確認できる。

調査地北側台地（段丘）の南側斜面は樹林となっているが、段丘面（頂上）に近い斜面では黒土直下は褐色粘土質ロームとなっており、黄褐色軽石質粗粒火山灰は確認できない。ところが斜面中腹になると腐葉土下に、黒土と混合した径0.5~1cmの礫を含む黄褐色軽石質粗粒火山灰の再堆積物が見られ、全体としては細粒~中粒の砂質層となっている。斜面麓部では黒色土が20~30cmと厚く、その直下には少ないながら中腹部と同様に黄褐色軽石質粗粒火山灰の再堆積物が認められ、褐色粘土質ロームとの混合層をなしている。

これらの事実から、調査地の北側台地及び南側台地には周辺地域と同様に、かつては黄褐色軽石質粗粒火山灰の降下堆積があったものと考えられる。現在欠くなっている原因としては調査地の北側台地および南側台地は東西の尾根状を成していて、火山灰が流出しやすい地形となっていること。また、牧草地、果樹園、畑地等農地化のため人工改変が行われてきたことなどが考えられる。



### 3-2 屏風山西・豊原(2)遺跡の復元

#### はじめに

前章までに示したとおり、今回の調査では豊原(2)遺跡では遺跡が発見されず、屏風山西遺跡からは少量の遺跡が確認された。ここでは調査結果を踏まえ、まとめを兼ねて、屏風山西遺跡を中心に両遺跡の復元を試みたい。

#### 1. 繩文時代

「2-3 繩文時代の遺構と遺物」で示したように、遺構は屏風山西遺跡の1基のみの発見で、繩文土器も散見される程度であった。江戸時代の荒廃や戦後の農地開墾により、屏風山西・豊原(2)遺跡付近は遺跡が破壊されてしまったらしい。地元の人々からは開墾時に相当量の土器が出土したと聞いている。その証拠に現在でも、屏風山西遺跡の調査地に近い斜面中腹の畠地では、土器が散見される（豊島ほか1980）。「1-4 地理的環境」で述べたように、両遺跡とも顔の沢溜池とそれと連なるキン堤溜池、狹ヶ館溜池の水源となる河川を背景として、丘陵とそれに伴う斜面に位置する集落遺跡だったと考えられる。屏風山西遺跡で発見された土器は円筒上層式を中心に、円筒下層～櫻林式土器だったが、溜池を挟み対峙し、円筒下層～上層式土器を主体とする石神遺跡と何らかの関係、具体的には共存する集落が、屏風山西・豊原(2)遺跡に存在していたとしても何ら不思議はない（図1）。今後明確な集落跡の発見を期待したい。また最近の森田村内遺跡の調査の結果、前期、円筒下層式土器の段階では、村内でも石神遺跡など数カ所にしか遺跡が発見されないのに対し、中期、特に円筒上層式の後半型式の段階になると、村内各所に小さくバラけるような感じで、遺跡が造営される傾向があるように感じられる。屏風山西遺跡やその他の石神遺跡北隣の遺跡も、この傾向の中に捉えられる可能性もある。

#### 2. 平安時代

2基の遺構が屏風山西遺跡で確認された。共に白頭山-苦小牧火山灰の降下年代（A.D.947年）を下限とする炭窯と推定した（「2-4-1 平安時代の遺構」参照）。森田村では平安時代は繩文前～中期について遺跡が多く発見される時代で、八重菊(1)遺跡に代表される鉄関連の遺跡が多く確認されている。鉄関連の遺跡には燃料としての炭生産のため炭窯がつきものであり、屏風山西遺跡にも鉄関連の遺跡が存在、ないしは農地造成以前には存在した可能性もある。2基の遺構が確認された位置も丘陵の南斜面麓部で、水



写真19 今も調査区に残る屏風山の松

辺に近いということからもそれを補強できる（注1）。

### 3. 江戸時代

屏風山西遺跡で少数の陶磁器片と、調査地に並走する用水堰跡を確認した（「2-5 江戸時代の遺構と遺物」参照、図22）。これらは津軽藩政時代の新山開拓、現在の鶴田町～車力村に及ぶ屏風山造営に関係したものである（図23）。津軽平野での新田開発が本格的



図22 「館野沢上溜池用水堰」のルート（昭和30年代）

開始は4代藩主信政の頃（治世：明暦2～宝永6, 1659～1709年）で、豊原(2)・屏風山西遺跡とともにその範囲に含まれる屏風山の植林もこの頃開始されている（社団法人東北建設協会1999）。秋ヶ館溜池も寛文12（1672）年に完成し、「館野沢上溜池用水堰」を管理した床前（現床舞）もこの頃から開墾が進められたとされる（佐藤ほか1954）。この植林は、野呂理左衛門らによって天和2（1682）年から開始され、元文2（1737）年には松や杉などその数86万2000本に及んだと言う（社団法人東北建設協会1999）。しかし野呂らの植林した木は、打ち続く天災・飢饉によって荒廃し、その後再建され安政2～明治7（1855～1874）年にかけて177万9400本を植林したという（社団法人東北建設協会1999）。調査区付近の松は、せいぜい樹齢100年程度であり、現存するのはこの再植林されたもので

あろう（写真19、図23）。また、屏風山西遺跡の調査で確認された用水堰の構築・稼動年代や、出土陶磁器の年代はすべて18世紀後半～19世紀前半のものと考えられた。打ち続く天災の中、新田開拓を続けた人々の姿がここから読み取れる。また、豊原(2)遺跡内には安永2年（1773）以後、明治初期までには墓域が設けられていたようだ（豊島編、発行年不詳、図24）。

### まとめ

今回の調査では大きく2つの事項が判明した。一つは、今回の調査で、屏風山



図23 屏風山の範囲



図24 明治初期の豊原(2)遺跡周辺（豊島編 発行年不詳より）

西・豊原(2)遺跡とも、大きく擾乱を受けていること。二つ目は、屏風山西遺跡の範囲が当初予想したものよりも東にずれるということである。

擾乱の原因は、前述したように江戸時代の用水堀造成・屏風山植林や戦後の農地開拓による地形変である。「3-1 遺跡の地学的考察」で川村眞一氏は、両遺跡の周辺で、黄褐色軽石質粗粒火山灰の欠落が見られる一つの要因としてこれら的人工改変を上げている（図21）。

屏風山西遺跡の範囲のずれについては、特に「2-1 繩文時代の遺構と遺物」で述べたように、事前に登録した遺跡範囲よりも、遺構・遺物の分布が東にずれていることが確認された。逆に言えば『森田村誌』上巻に示された遺物分布状況図（豊島ほか1980）の正確さが証明されたのである。現在の遺跡範囲は、キン堤溜池に面した丘陵部付近の西側部分となっているが、東側部分を中心とすることが判明した（図25）。

以上のように今回の調査では、遺跡の性格を掴むような成果は得られなかった。しかし当初縄文時代と考えていた屏風山西遺跡に平安時代の遺跡を発見したことは、時代的変遷を見る上で大きな成果と言える。今後は、周辺部を含めた調査によって両遺跡の解明に努力したい。

（注1）八重菊(1)遺跡で発見された鉄門連造構は南斜面の水辺に近いところに造成され、炭窯なども、沢筋に近い斜面上に位置する（『八重菊(1)遺跡』2001年3月刊行予定）。また、栃木県北部でも同様な傾向にあるという（伊藤博之か2000）。

伊藤博之か（2000） 「鉄溶分析による桶木  
県南部の製鉄関連遺跡について」  
『店澤考古』19 店澤考古会

佐藤公加（1954） 「西津軒郡史」  
p.318 西津軒郡編集委員会

社団法人東北建設協会（1999）  
『津軒平野と岩木川のあゆみ』  
岩木川治水史 p.80-82  
建設省東北地方建設局青森工事事務所

豊島勝哉（1980） 「森田村誌」上巻  
p.99 森田村教育委員会

豊島勝哉（発行年不詳）  
『下原家文書 津軒新山記録』巻7-2  
p.199-202 森田村教育委員会ほか

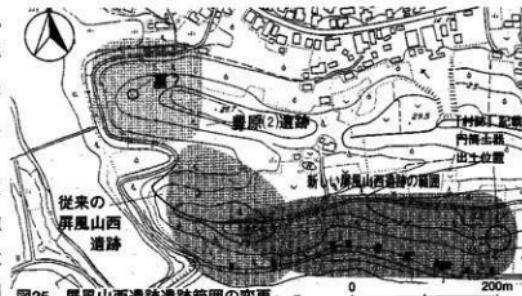


図25 屏風山西遺跡遺跡範囲の変更：元



写真20 農地に開墾された屏風山西・豊原(2)遺跡

## 主要参考文献

- 青森県教育委員会（1998）『青森県遺跡地図』  
伊藤博之ほか（2000）『鉄滓分析による栃木県南西部の製鉄関連遺跡について(2)』  
江坂輝彌ほか（1970）『石神遺跡』 森田村教育委員会  
九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年—九州陶磁学会 10周年記念—』  
工藤睦男（1987）『木造町史』 近世編 下巻 木造町役場  
佐藤公知ほか（1954）『西津軽郡史』 西津軽郡史編集委員会  
佐野忠史（2000）『石神遺跡 3』 森田村遺跡整備・活用計画発掘調査報告書 3  
鶴倉巳三郎（1978）『昭和51年度青森県内から出土した炭化材の樹種について』  
『源常平遺跡発掘調査報告書』  
青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第39集 青森県教育委員会  
嶋倉巳三郎（1980）『板留(2)遺跡から出土した炭化材の樹種』  
『板留(2)遺跡発掘調査報告書』  
青森県埋蔵文化財調査報告書 第59集 青森県教育委員会  
嶋倉巳三郎（1987）『山本遺跡出土の炭化木』『山本遺跡』  
青森県埋蔵文化財調査報告書 第105集 青森県教育委員会  
社団法人東北建設協会（1999）『津軽平野と岩木川のあゆみ 岩木川治水史』  
建設省東北地方建設局青森工事事務所  
千野裕道（1983）『縄文時代のクリと周辺植生—南関東地方を中心に—』  
『東京都埋蔵文化財センター研究論集』 II  
豊島勝蔵ほか（1980）『森田村誌』上巻 森田村教育委員会  
豊島勝蔵（1989）『森田村誌』下巻(毫) 森田村教育委員会  
豊島勝蔵編（発行年不詳）『下原家文書 津軽新山記録』卷7-2 森田村教育委員会ほか  
西村正衛ほか（1952）『青森県西津軽郡森田村付近の遺跡調査概報』『古代』第5号  
早稲田大学考古学会  
早川由紀夫・小山真人（1998）『日本海を挟んで10世紀に相次いで起った二つの大噴火の年月日』  
『十和田湖と白頭山—』『火山』43  
パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）『外馬屋前田(1)遺跡出土植物遺体の同定』『外馬屋前田(1)遺跡』  
青森県埋蔵文化財調査報告書第242集 青森県教育委員会  
町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）『日本海を渡ってきたテフラ』『科学』51  
水野 裕ほか（1987）『土地分類基本調査 五所川原』 青森県農林部土地改良第一課  
三宅徹也ほか（1994）『青森県遺跡詳細分布調査報告書VI』  
青森県埋蔵文化財調査報告書第165集 青森県教育委員会  
森田村教育委員会（1998）『森田村の遺跡』『森田村文化財振興計画書』

写真図版 P.L. 1



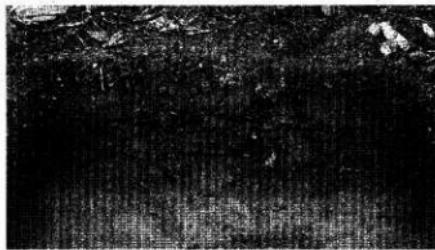
①試掘坑No. 1



②試掘坑No. 2



⑤試掘坑No. 4



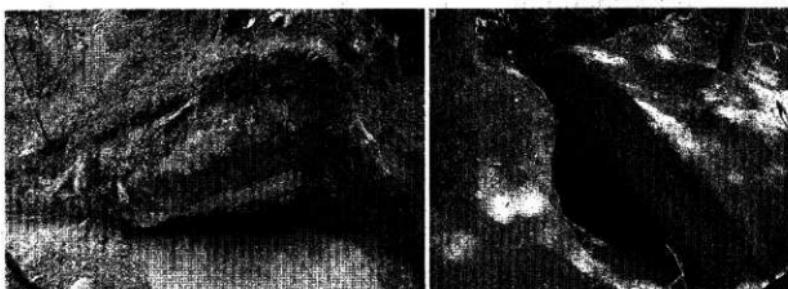
③試掘坑No. 4



⑥試掘坑No. 5



④試掘坑No. 7



③試掘坑No14



## SUMMARY

Byobuzan-west-site[屏風山西遺跡] and Toyohara(2)-site[豊原(2)遺跡] are located at the northern most foot of Mt. IWAKI. Both sites are situated on the side of hills which these are about 30 meters above sea level. Both sites stand on Ezogatake-reservoir[狹ヶ館溜池] and Kinzutsumi-reservoir[キン堤溜池]. These were damed rivers during the Edo-Age.

Before our survey, the details of both sites were not clear. However, the Ishigami-site[石神遺跡] which contains ruins and relics from early to middle period of the Jomon-age, located on the western side of both sites, we supposed that the sites contained similar ruins and relics.

We carried out preliminary surveys in 1997 on Toyohara(2)-site (September 7th) and on Byobuzan-west-site (at October 21th). At this stage we understood that Toyohara(2)-site contained no relires and ruins around the agricultural road. We decided that it was not necessary to survey on Toyohara(2)-site area, so carried out an archaeological survey on Byobuzan-west-site area.

So the archaeological survey was carried out from August 1st to 31st in 1999. We made 14 test-pits.

In three of them, we found ruins from the Jomon-age and Heian-age. The ruins of the Heian-age were supposed to be charcoal kilns and radio carbon dating indicated an origin of  $1200 \pm 40$ B.P..

The function of the ruins of the Jomon-age was not clear. The relires were little broken pieces of Jomon-wares and Heian-wares called, "hajiki" [土師器] and "sueki" [須恵器].

These were discovered beside, an irrigation and a bank which were constructed during the 18th century.

Thank you to all the survey staff.



写真21 整理作業スタッフ

## 報告書抄録

ふりがな	びょうぶざんにしいせき・とよはらかっこにいせき						
書名	屏風山西遺跡・豊原(2)遺跡						
副書名	農村総合整備事業（市町村型）に伴う緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	森田村緊急発掘調査報告書						
シリーズ番号	6						
編著者名	佐野忠史						
編集機関	青森県西津軽郡森田村教育委員会						
所在地	〒038-2892 青森県西津軽郡森田村大字山田字山崎61 TEL 0173-26-2111						
発行年月日	西暦2001年（平成13）3月21日						
ふりがな 収録遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
屏風山西遺跡	青森県西津軽郡 森田村大字森田 守駒ヶ淵地内	02324 19011	40° 46' 28"付近	140° 20' 5"付近	1999.8.1 ~ 1999.8.31	約50m <sup>2</sup>	農道3-1 造成に伴う 緊急発掘調 査
豊原(2)遺跡	青森県西津軽郡 森田村大字床舞 字豊原地内	02324 19044	40° 46' 35"付近	140° 19' 53"付近	1997.9.7	約10m <sup>2</sup>	
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
屏風山西遺跡	散布地	縄文時代 平安時代 江戸時代	土坑1基 竪穴状造構2基 堤1基 堰1基	円筒土器・櫛目土器片 土師器・須恵器片 肥前陶磁器片	・平安時代 の竪穴状遺 は炭窯と推 定された。		
豊原(2)遺跡	散布地				検出なし		

### 屏風山西遺跡・豊原(2)遺跡

#### —森田村緊急発掘調査報告書 第6集—

発行 青森県西津軽郡森田村教育委員会

〒038-2892 青森県西津軽郡森田村大字山田字山崎61

TEL 0173-26-2111

発行年月日 2001（平成13）年3月21日

印 刷 東北印刷工業株式会社

青森県青森市合浦1-2-12

TEL 017-742-2221

## 屏風山西遺跡・豊原(2)遺跡

2001

青森県森田村教育委員会  
森田村緊急発掘調査報告書 6